

論文

莊子注釈書体例考《其の4》

承 前

平 木 真 快

《其の4》は、《其の3》で検証した資料9件の一覧表を付録した後に、  
④9：1637年、南華真經注疏，程以寧から、⑤8：1670年、莊子之学，馬驥まで  
を収録する。

体 例 一 覧 表

④0 — ④8

凡例 ○：有る  
×：無い  
◎：初出

No	書 著 名 者	成書	依拠	自序	他叙	目次	雑説	原文	音注	小注	改行	句点	読点	符号	篇旨	特異	一字 下	跋
40	孤 白 韓 敏	1614	明末	○ ※ 1	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×
41	日 抄 徐 曉	1615	明末	○ ※ 3	○	○ ※ 4	○	○	○	○	×	○	×	×	○	◎ ※ 5	○ ※ 6	○
42	解 莊 陶 齡	1615	明末	×	×	×	×	○ ※ 7	○	○	×	×	×	○	×	×	○ ※ 8	×
43	集 註 潘 慶	1620	明末	○	○	○ ※ 9	○	○ ※ 10	○	○	×	○	×	○	○	◎ ※ 11	×	×
44	分章句解 陳 選	1620	明末	×	○	○	×	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×
45	内 篇 積 德	1621	明末	×	×	×	×	○	○	○	×	○	×	×	○	×	○	×
46	蒼 解 郭 翰	1626	明末	○	○	○ ※ 12	×	○	○	○	×	○	×	×	○	×	○	×
47	真經本義 陳 治	1632	明末	○	○	○ ※ 13	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×	○	×
48	南華真經 譚 元	1635	明末	○	○	○ ※ 14	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	○	×

※1：ここでは総論という。頭注に：

括尽全南華。

という。恐らくは、自序（韓敬）であろう。

※2：各篇の篇旨と篇末の評語は4字下げ。

※3：劉侗の徐曙菴先生南華日抄序の後に、林盧斎莊子口義發題を配する。

この発題の最後部に、徐暁の評を載せる。発題にいう：

右、盧斎述称莊子究帰無得罪於聖門云爾。謂之知莊子可也。謂之  
尽莊子之蘊則未也。……愚故録其説於此，而敢附鄙説於後，以識  
晚年来枕籍於斯之意云。

「録其説」とは、林盧斎の説を指す。この小論は、徐暁が林盧斎の  
説を引用した後、評語を少し加えることによって、自序の体裁を整  
えたものと考えられる。

※4：ここでは総目という。全体を4巻に分けて、篇名の左側2字下げの  
位置に篇旨を記す体例は初出。

※5：目次（総目）の前に、凡例を載せる。凡例という語の使用は、莊子  
注釈書の中では本書が初出。

※6：頭注及び各篇末に付した総論には1字下げあり。但し、原文には1  
字下げなし。

※7：篇末に一括して付録する。

※8：原文中、各大段落末に付した陶望齡の解は1字下げあり。

※9：ここでは南華経目という。

※10：篇末に一括して付録する。但し、外雜篇は原文中、小文字2行で記  
す。拙著莊子注釈書体例考《其の3》の94頁に：

⑤《音注》は、……各卷末に付録した外雜篇にはない。

と述べたのは、筆者の誤解であった。不注意を差じつつ訂正する。

※11：天下篇第三十三を莊子の自序とみなし、逍遙遊篇第一の前に配した  
のは初出。また、内篇の各篇を主軸にし、関連すると思われる外雜  
篇を付録するという配置転換を試みたのも初出。

※12：ここでは目録という。

※13：雑説は莊子本義付録（南華本義付録ともいう）と題して、別に1巻を成す。陳治安の自序以下、計8篇を収録する。末尾に嚴靈峯の跋あり。

※14：ここでは目録という。

④91637年——⑤81670年

49：1637年，南華真經注疏，程以寧，拠中華民國国立台湾大学図書館蔵・清嘉慶間蔣光庭道藏輯要本影印。

本書は清・嘉慶間（1796年－1820年）刊道藏輯要の影印本であるが、跋文（南華真經注疏伝神集後序）に：

崇禎十年八月将望日，程以寧拝序。

とあることに依拠して、1637年を成書年とする。

本書は：

- 1：序
- 2：本文
- 3：跋

より成る。以下，説明する。

※1：〔序〕は3篇ある。

- ①南華真經注疏序（鄒忠光序）
- ②南華真經注疏自序（程以寧撰）
- ③南華真經注疏題詞（汪伯修題）

※2：〔本文〕は：

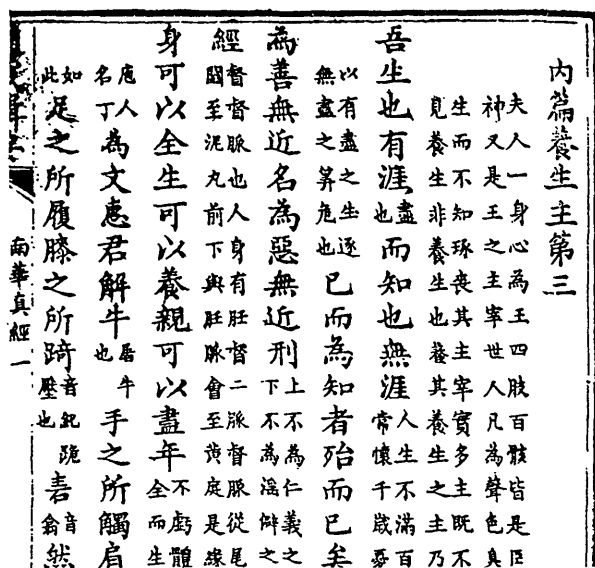
- ①：篇名
- ②：篇旨
- ③：原文（小注・音注を含む）
- ④：評釈

より成る。

- ①《篇名》は、例如「内篇逍遙遊第一」，以下同例。各篇名上部に、内篇・外篇・雜篇の2字を冠する。
- ②《篇旨》は、篇名の左1字下げ，原文の右側2字下げの位置に記す。小文字2行。句読点なし。
- ③《原文》は，短句毎に小注（音注を含む）を挟む。小注は小文字2行で，原文より1字下げ。小注は陸西星・林希逸・呂吉甫・李士表・陳詳道等各家の説を引く。就中，陸西星が最もよく引用されている。丹經・陰符經，また仏典も少し引く。句読点なし。圈点なし。
- ④《評釈》は，各篇末に原文より1字下げの位置で，まとめて載せる。文字の大きさは原文と同じ。文頭は「復圭子曰」の4文字から始まる。復圭子とは程以寧の号。

※3：〔跋〕は，ここでは南華真經註疏伝神集後序という。

本書の体例は，全体に平凡であるが，原文を目立たせる為に，小注部分を一律1字下げにした点は，評価できる。目次なし。



50：1638年，南華春点，劉士璉，美国国会図書館蔵・摺明刊本影印。美国国会図書館蔵善本書目著録。孤本。

自序に：

崇禎戊寅歲孟春之吉，螺川劉士璉席白父撰。

とあることに依拠して，1638年を成書年とする。

本書は：

1：序

2：本文

より成る。以下，説明する。

※1：〔序〕は2篇ある。

①自序南華春点（劉士璉撰）

②劉席白先生南華春点序（劉理順序）

※2：〔本文〕は：

①：篇名

②：篇旨

③：原文（小注・音注を含む）

より成る。

①《篇名》は，例如「内篇逍遙遊第一」。内篇は，毎篇「内篇」の2字を冠する。外篇は，駢拇第八から在宥第十一までは「外篇」の2字を冠するが，天地第十二から知北遊第二十二までは冠しない。雜篇は，庚桑楚第二十三は「雜篇」の2字を冠するが，徐無鬼第二十四から天下第三十三までは冠しない。

②《篇旨》は，篇名の左側1字下げの位置に記す。小文字2行。句点あり。読点なし。

③《原文》は，短句毎に小注（小文字2行）を挟む。小注の内容は，語釈あるいは原文補充。前後の流れを勘案した上で，最少の語を補充することによって，原文の意味がより滑らかに連結するように工夫したのである。たとえば：

凡物無成与毀，復通為一。惟達者知通為一。（齊物論篇）  
の場合，

凡物無成与毀く自没有成則無有毀く，復通為一く矣く。惟達く  
道く者く纔く知く万物く通く而く為く一。

以上の如く、原文に数語を補充しさえすれば、当時（明末）の人々は勿論のこと、現代に生きる我々にも、文の流れを滑らかに了解することができるのである。語釈は、意味を正確に理解する上で必要不可欠のものではあるが、原文のもつ味わい乃至は雰囲気壊す欠点がある。莊子特有の味わいを壊すことなく、また原文を勝手に削除加筆することもなく、莊子の心を伝えた本書の工夫は評価できるのであろう。

音注は、原文右横に小文字で同音の文字を記す。

句点あり。読点なし。圈点なし。改行なし。

本書は劉士璉 1 人の手によって成った専著ではない。今風にいえば、グループ研究の成果なのであって、執筆分担者の籍貫・姓名・別署及び研究内容（註・較・校・甫）は、篇名の左下に明記されている。劉士璉が分担したのは、全体の約 1 / 4 弱である（それは以下の 8 篇）。

内篇逍遙遊第一

内篇徳充符第五

外篇駢拇第八

天地第十二

刻意第十五

達生第十九

雜篇庚桑楚第二十三

讓王第二十八

目次・跋ともになし。

51：1639年，莊子雋，陳繼儒，日本内閣文庫蔵・捫明蕭鳴盛刊五子雋本影印。伝是楼書目著録（見馬森著莊子書録）。

本書は：

1：目次

2：本文

より成る。以下、説明する。

※1：〔目次〕は、内篇のみあり。例如「逍遙遊」，以下同例。

※2：〔本文〕は：

①：篇名

②：篇旨

③：原文（小注・頭注・音注を含む）

④：評釈

より成る。

①《篇名》は，例如「逍遙遊」，以下同例。

②《篇旨》は，篇名の下に小文字2行で記す（極めて簡略）。

③《原文》は，短句毎に小注（小文字2行）を挟む。原文上部欄外に，小文字4段の頭注がある。頭注は音注を含む。原文は句点あり，読点なし，圈点あり（2種）。

<sup>○</sup>  
<sup>○</sup>  
<sup>○</sup>  
<sup>○</sup>  
 □□□□  
 ◌◌◌◌  
 □□□□  
 ◌◌◌◌

④《評釈》は，各篇末に原文より1字下げの位置で，一括して載せる。句点あり。読点なし。圈点なし。楊復所・袁石浦・方華村等諸家の説を引く。

本書の体例は全体に平凡で特異点はない。序なし。改行なし。跋なし。

52：1644年<sup>※1</sup>，薬地炮莊<sup>※2</sup>，方以智<sup>※3</sup>，挹民国21年成都美学林排印本影印<sup>※4</sup>。

※1：〔1644年〕，成書年は不明。暫くは，嚴靈峰の説に従って，1644年を成書年とする。

嚴靈峰は，薬地炮莊を以下の如く説く：

……集各家説，並附己意……各家雜説引証極為広泛……可窺見宋明諸家

雑説……按：所引多明末遺民之説，方氏此書当成於清初，因入清不仕，茲暫附明末。（見嚴著莊子知見書目・中編139頁）

方以智の入清不仕の條に関して，中国人名大辞典（民国10年，台湾商務印書館，59頁）はいう：

……明季四公子之一。崇禎進士。官檢討。入清為僧。

嚴靈峰は，方以智が終生明の臣たることを守って清朝には仕官せず，僧となったこと，また，葉地炮莊に引く諸家の多くが明末の遺民であることを理由に，成書年を明末清初と推定したのであろう。

筆者は，葉地炮莊に引く諸家・諸書が200件以上もあり，葉地以前の莊子注釈書には登場しない人名が多く見られるのは，嚴氏が指摘しているように，明末の遺民である可能性が高いこと，及び此軒蔵の原刊本が清の康熙3年（1664年）初版であることに依拠して，成書年を明末清初とする説は，当然と雖も遠からずといった程度の信憑性はあると考えている。

※2：〔葉地炮莊〕，前掲・中国人名大辞典にいう：

名，弘智。字，無可。人称，葉地和尚。

別称「葉地和尚」に因んで，書名としたのであろう。

※3〔方以智〕，開卷冒頭にいう：

天界覺丈人評，極凡学人弘智集，三一齋老人正，涉江子陳丹衷訂。

方以智は，別署を「浮山愚者」・字を「無可」・自署を「極凡学人」という。葉地炮莊の原文大段落後部の評釈では，自らを「愚者」・「愚」と称している。筆者は，これを批判している：

賢愚に拘るのは物論の弊である。これは莊子齊物の思想には馴染まない。

※4：〔影印〕，嚴靈峰はいう：

清康熙3年，此軒蔵原刊本。民国21年，臨羨閣校輯本。民国31年，成都美学林拠「此軒蔵」本排印本。（見莊子知見書目・中編139頁）

馬森はいう：

民国成都美学林排印本四冊，見江蘇省立国学図書館現存書目。（見莊子書録）



筆者所蔵の影印本は、嚴靈峰によれば：

芸文印書館、挾民国21年成都美学林排印本影印。（見無求備齋・莊子集  
成初編17）

ということになっている。この影印本が、嚴氏所説の如く、康熙3年初版の「此軒蔵」本に挾って忠実に排印されたものであるならば、体例上の資料価値は存する。

本書は、排印本を見る限りでは、序・目次・跋を欠く。従って、本文のみを検討するしかない。本文は：

- ①：篇名（内・外・雜）
- ②：篇旨（内篇と外篇）
- ③：篇名（三十三篇）
- ④：篇旨（内七篇のみ）
- ⑤：原文（小注・音注・頭注）
- ⑥：評釈

より成る。

- ①《篇名》は、内外雜の3篇あり。原文より1字下げの位置に記す。
- ②《篇旨》は、内外の2篇のみあり。雜篇はなし。原文より2字下げの位置に記す。句点あり。読点なし。改行なし。圈点あり（1種）。

□□□□（句点と圈点が同形同位置なので、混同すると区別がつかない）。

- ③《篇名》は、例如「逍遙遊第一」，以下同例。原文より2字下げの位置に記す。計33篇あり。
- ④《篇旨》は、内篇の7篇のみあり。原文より3字下げの位置に記す。句点あり。読点なし。改行なし。圈点あり（4種）。

□□□□  
△△△△  
□□□□  
○△○△



内外両篇の篇旨及び内篇7篇の篇旨は、諸家の説を多く引用する。  
方以智の説は、篇旨末尾の「愚者曰」以下に述べる。

- ⑤《原文》は、1字下げなし、版面最上段を占める。改行なし。句点あり。読点なし。圈点あり（4種、④の篇旨所掲と同形）。

原文大段落毎に、小注（小文字2行、句点あり）を一括して付す。概ね簡略。

音注は、原文該当語の下に挟む（例如：音教。小文字2行）。

頭注は、小文字6段。句点あり。諸家の説を多く引く。

- ⑥《評釈》は、原文大段落毎に、一括して付す。原文と同寸文字、原文より1字下げ、句点あり、読点なし。圈点あり（4種、④の篇旨所掲と同形）。

諸家の説を多く引く。但し、それらは孰れも出典箇所不明（例えば、「陶石簣曰」・「北山録曰」とのみ述べる。これは頭注も同様。）。引用は全体に雑駁。文字解釈は厳密ではない。馬森は此の点を、四庫全書の言を借りて、以下の如く批判する：

四庫全書総目提要曰：「大旨詮以仏經，借混洋恣肆之談，以自據其意，蓋有託而言，非莊子当如是解，亦非以智所見真謂莊子当如是解也。」（見馬著莊子書録）。

53：1644年，莊子南華真經，黃正位，挾中華民國國立中央圖書館藏明刊巾箱本影印。

成書年は不明。影印本には、成書年を確定する為の手懸りはない。暫くは、嚴靈峰の説に従って、1644年を成書年としておく。嚴靈峰はいう：

黃正位……「尊生館主人」。……黃係書坊刻書人，「四川省立圖書館藏書目」作「清黃正位校本坊刻袖珍本」。疑黃係明末清初人，茲暫列明末。

本書は：

1：目次

2：本文

より成る。以下、説明する。

※1：〔目次〕は、ここでは「目録」という。計8巻ある。例如「逍遙遊第一」，以下同例。

※2：〔本文〕は：

- ①：篇名
- ②：篇旨
- ③：原文（頭注を含む）

より成る。

①《篇名》は，例如「内篇逍遙遊第一」，以下同例。全篇，内外雑の篇名を冠する。位置は原文と同位。但し，説劍篇以下は1字下げ。

②《篇旨》は，篇名左横1字下げの位置に，原文よりやや小さめの文字で記す。以下の各篇は，篇旨を欠く：

外篇至楽第十八

外篇田子方第二十一

外篇知北遊第二十二

雑篇盜跖第二十九

雑篇説劍第三十

雑篇漁父第三十一

雑篇列禦寇第三十二

句読点なし。圈点なし。内容は簡略。

③《原文》は，白文のみ。小注・改行・句読点・圈点共になし。

頭注は，小文字2段，内容は音注のみ。

全体に特異点なし。体例・内容共に極めて貧弱，注釈書としての価値は零に近い。

54：1663年，莊子因，林雲銘，拠清乾隆間刊本影印。

莊子因の版本について，嚴靈峰はいう：

清康熙二年原刊本。

清康熙二十七年改訂刊本。

清康熙五十五年挹奎樓增註刊本。

清白雲精舍刊本。

清乾隆間重刊本。

(以下略、見莊子知見書目・中編149頁)

(一)筆者蔵本所収「増註莊子因序」には：

康熙戊辰……林雲銘西仲氏題於……。

と記されている。康熙戊辰は、康熙27年、1688年である。

(二)筆者蔵本の版面下傍に、「白雲精舍」という文字が毎葉見える。

上述の(一)と(二)によって、筆者蔵本は、康熙27年改訂刊本所収「増註莊子因序」を載せた乾隆間重刊白雲精舍本とわかる。

以上の考察から、この白雲精舍本は、康熙2年の原刊本を改訂・増註したもののようであるが、その改変程度が如何ようなものであるにせよ、筆者は、この資料に拠って、初版本の体例を窺い知るしかない。

幸い、①第1回の改訂をした当時、林氏はまだ生存しており、林氏自身が増註本の序を撰述していること・②改訂回数が僅少であること・③原刊本から白雲精舍本までの年月が短いこと(17世紀中葉－18世紀末)から判断して、筆者蔵本は、原刊本の原初形態がわからなくなる程、大きく改変したものではないと思われる。

本書は：

1：序

2：凡例

3：目次

4：序論

5：本文

より成る。以下、説明する。

※1：〔序〕は、林雲銘の自序。題して：

増註莊子因序

という。序にいう：

①余註莊二十有七年矣。

序の末尾にいう：

②康熙戊辰（※康熙27年）……林雲銘西仲氏題於……。

嚴靈峰はいう：

③康熙癸卯季秋（※康熙2年）自序。清康熙二年原刊本。

①と②は符合する。筆者は原刊本を見たことがないので自信はないが、①と②から逆算すると、初版年を康熙2年とする③の蓋然性は高い。

※2：〔凡例〕は、計5則ある。これを読むと、林雲銘は体例について、明確な意識をもっていた事が看取される。凡例はいう：

（一）、字面訓詁，照填於本句之下。然後，再解本句之意。如本句既解應合數句而總解者，必加一小圈別之。

（一）、每段必分疏本段大意，或加評語。凡遇小段則加已上二字，遇全段則加通段二字，俱加一小圈別之。

（一）、凡，篇中綱領段中眼目，必旁加重圈◎。其埋伏照應處旁加黑圈●。其措意精深摘詞工妙處旁加密圈○○○○。其轉折另提或襯貼找足處旁加密點ヽヽヽヽ。其小住歇處，必加橫截一。其大住歇處，必加曲載└。

原本欠略，今悉補出。庶學者開卷了然，不煩探索。

（一）、每篇後總論，必先揭出本旨，逐段脚接脫卸。（※以下略）

（一）、原本音註，總彙二紙冠於編首。今恐煩學者檢閱，特改列於本字之傍，舉目即得，甚為省力。

西仲氏再識

凡例 計五則

一字面訓詰照填於本句之下然後再解本句之意如本句既解應合數句而總解者必加一小圈別之

一每段必分疏本段大意或加評語凡遇小段則加已上二字遇全段則加通段二字俱加一小圈別之

一凡篇中綱領段中眼目必旁加重圈。其埋伏照應處旁加黑圈。其措意精深摘詞工妙處旁加密點。〇。〇。其轉折另提或襯貼找足處旁加密點、、、、

其小住歇處必加橫截一其大住歇處必加曲截し原

莊子

凡例

白雲精舍

本缺畧今悉補出庶學者開卷了然不煩探索

一每篇後總論必先揭出本旨逐段啣接脫卸如撰一篇全章八股文字俱要還他渾渾成成一篇妙文不敢如

前此註莊諸家輒指東話西自逞機鋒將本旨盡行埋沒却也只眼者諒必知之

一原本音註總彙一紙冠於編首今恐煩學者檢閱特改列於本字之傍舉目即得甚爲省力

西仲氏再識

※3：〔目次〕は、ここでは篇目という。例如「逍遙遊」，番号なし，以下同例。但し，本文では例如「内篇逍遙遊第一」，以下同例。計6巻に分ける。内外両篇は，全篇あり。雜篇は，讓王第二十八・盜跖第二十九・說劍第三十・漁父第三十一を省く。

※4：〔序論〕は：

①莊子総論

②莊子雜説（計26則）

を載せる。この両篇は，莊子概説に相当する。①は総論，例如：

三十三篇之中，反覆十余万言，大旨，不外明道德・輕仁義・一死生・齊是非・虚静恬澹寂寞無爲而已矣。篇之有内・有外・有雜，皆出於世俗，非当日著書本意。……蘇子瞻謂：「分章名篇，皆出於世俗，非莊子本意」，猶信。

②は各論，例如：

(一)、莊子另是一種學問。與老子同而異，與孔子異而同。今人把莊子與老子看做一樣，與孔子看做二樣，此大過也。

(一)、莊子全部以內七篇為主，外篇雜篇旨各分屬而總不離其宗。今人誦其文，止在字法句法上着意，全不問其旨之所在，此大過也。

(一)、莊子旨近老氏，人皆知之。然，其中或有類於儒書・或有類於禪教。合三氏之長者，方許讀此書。

(一)、莊子為解不一。或以老解・或以儒解・或以禪解，究竟牽強無當。不如還以莊子解之。

上述の如く、①と②の論旨・論勢は終始一貫している。蓋し、同一人物の手に成ったものであろう。敢えて断定はしないが、林雲銘を最有力候補としたい。

※5：〔本文〕は：

①：篇名

②：原文（小注・音注・圈点・符号を含む）

③：評釈

より成る。

①《篇名》は，例如「内篇逍遥遊第一」，以下同例。1字下げなし。

②《原文》は，小文字2行の小注を挟む。原文・小注ともに句「読」点あり。但し，本書の読点は「，」ではなくて「。」，すなわち句点と同形である。読点は文字の真下に打ち，句点は文字の右下に打つ。例如：

（句点）

（読点）

其名爲鯢。

北冥有魚。

音注は、原文右横下に小文字で同音文字を記すか、或いは四声

・反切を表示する。例如：

(同音文字)

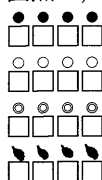
号 號

畏 偉  
佳 萃

(四声)

和 夫  
聲

圈点は、4 種ある。如下：



以上 4 種の圈点の意味については、凡例で説明済み。

符号は、3 種ある。如下：

A：○

B：—

C：L

(A)：小注は、字解と段落説明より成る。字解だけの時は不要だが、段落説明を

する必要がある  
時は、両者を区  
切る為の符号  
「○」を挟む。  
「○」以下は、  
大小の段落の範  
囲・流れ・要旨  
・批評等を述べ  
る。

○此句起下六句  
○諸言止此  
(流れ)

○設一喻取勢  
○大字是一篇之綱  
○分點出翼之大  
(要旨)



(範囲と要旨)

(批評)

○愚意――。

○莊叟可謂尊孔之至。  
書中貶聖處皆非本意。

○自言非吹句至此言  
是非本自無定。  
皆成心爲之耳。

○自隨其成心句至此  
言物論皆人心所造也。

小段落末尾には「已上」という2字を冠してから、其の要旨を述べる。

中・大段落末尾には「此段」「通段」「全段」等2字を冠してから、其の要旨を述べる。

○  
已上

○  
此段

○  
通段

○  
全段

(B)：段落中、小住歇処＜小休止をすべき箇所＞には、「一」を打って区切る。

(C)：段落中、大住歇処＜大休止をすべき箇所＞には、「┐」を打って区切る。

③《評釈》は、各篇末(1字下げ)に、原文と同じ大きさの文字で記す。句

而○後○乃○今○將○圖○南○  
南○冥○者○天○池○也○

読点の打ち方及び圈点は、原文と同じ。

凡例に拠って、清康熙2年刊原本の体例を推測してみるに、それは読者の便利を殆ど考慮していない代物であったと思われる。すなわち、凡例でいう所の「小圈」「重圈」「黒圈」「密圈」「密点」「横截」「曲截」はなく、また、音注も「冠於編首」であった為、検閲は煩しかったに違いない。

改訂本は改行なし、跋もなし。

55：1665年、頭書莊子<sup>※1</sup>、菅玄同・熊谷立設<sup>※2</sup>、扨日本寛文5年（1665年）刊<sup>※3</sup>・平木真快私蔵本。

※1：〔頭書莊子〕、表紙には「頭書莊子」という。目次には「莊子虞齋口義」という。嚴靈峰は、菅玄同版を「頭書莊子」といい、熊谷立設版を「頭書莊子口義」といているが、この二つは異名同一書籍である。筆者は、今暫くは、表紙に従って、「頭書莊子」を書名とする。

※2：〔菅玄同・熊谷立設〕、撰者は玄同と立設の2人であろう。嚴靈峰はいう：

未著撰人姓名。按：「倭版書籍考」有「菅徳庵・熊谷立設両家頭書莊子」又「目錄大成」亦載熊谷立設「莊子口義頭書十卷」，当即此書。（見嚴著莊子知見書目・中編250頁）

本書は「頭書莊子」と称するだけであって、頭注部分の記載は（各家の引用が殆どではあるが）、極めて豊富である。その中に、「玄同」あるいは「設」といった人名が散見する。これを頁順に詳しく考察すると、計10巻の内訳は如下：

巻1：

- 1 玄同謹按云
- 2 玄同案
- 3 余按
- 4 按云
- 5 按
- 6 余謹按云

7 謹按

「玄同」とは「蒼玄同」の謂であろう。最初は「玄同謹按云」と丁寧述べているが、注釈の書き出し部分は次第に省略される。すなわち、2番目は「謹」を省き、3番目は「玄同」の代りに代名詞「余」を用い、4番目は代名詞さえも省く。

巻1の注釈書は、「蒼玄同」と認定してよいであろう。

巻2：

- 1 設謹案
- 2 設案
- 3 設謹案
- 4 玄云
- 5 按

「設」とは「熊谷立設」の謂であろう。4番目の「玄云」は、立設が玄同の言を引用したことを示している。例如：

循本云

易説卦曰

引用語には「云」あるいは「曰」を用いるのが通例である。

巻2の注釈は、「熊谷立設」1人の手に成ったものと認定してよいであろう。

巻3：

- 1 玄云

「玄云」の2字が随処に見られる。立設の按文はないが、注釈者は巻2以後、変動していないと判断してよからう。

巻4：

- 1 案云

「案云」の主語は、これ迄の流れから判断して、「立設」とするのが妥当であろう。

巻4には、「玄同」という名の由来を暗示する注が何気なく記載されてい

る。すなわち、外篇胠篋第十の原文「天下之德始玄同矣」の「玄同」の条を、立設は次のように注釈する：

玄同二字，出老子。言，同玄德也。（卷4第6葉右頁頭注参照）

因みに、玄同の字は「子德」，通称は「徳庵」である。「同玄德」と符合するのは偶然であろうか。

立設は、恐らくは彼の先輩か師に相当するであろう所の玄同になり代って、名の由来を注釈に紛れて密かに述べたという訳である。巻1には逍遙遊篇と斉物論篇が収められている。莊子書の最重要部分といってよい。立設は玄同の顔を立てて、巻1の注釈は、玄同に譲ったのではなかろうか。また、巻1の私注が「玄同謹按云」で始まるのに対して、巻2は「設謹案」という語で書き出されている。これも、立設が玄同の顔を立てて、敢て「立設」とはせずに、1字欠落して「設」としたのではあるまいか。（※全巻、「立設」という語は見当らない）

こう考えてみると、玄同と立設の関係は、強いて上下を論ずるならば、玄同が上位・立設は下位といえそうである。

巻5：

- 1 設謹案云
- 2 按
- 3 謹案云

巻6：

- 1 設案云
- 2 設謹案云
- 3 設謹按云
- 4 設謹按
- 5 設案

巻7：（※なし）

巻8：

- 1 設案云

卷9：

1 設案云

卷10：（※なし）

以上の考察から、巻1の注釈者は「菅玄同」、巻2以下の注釈者は「熊谷立設」と認定することができると思う。

※3：〔寛文5年刊〕、嚴靈峰は、熊谷立設の頭書莊子口義の成書年次を1655年とし、出版は：

承応間刊本

寛文五年、風月庄<sup>マア</sup>右衛門刊本

としている。承応（1652－1655）4年が、承応の最終年なので、1655年を成書年次に当てたのであろう。筆者蔵本は、奥書に依れば：

寛文五乙巳歲孟秋吉祥日、風月庄左衛門開版

と記されている。

本書は：

- 1：序
- 2：目次
- 3：本文
- 4：跋
- 5：付録

より成る。以下、説明する。

※1：〔序〕は：

- ①仮題「南華真經口義林同序」・林同・宋景定辛酉（1261年）
- ②莊子虞齋口義発題・林希逸・（※著作年不明）
- ③穆陵宸翰・宋理宗・（※頭注にいう：「穆陵，宋理宗之廟号也。  
宸翰則天子之御冊也」。宋理宗が林希逸に与えた書翰である。年次は不明）

を載せる。①は他叙，②は自序，③は天子の褒状。

※2：〔目次〕は、ここでは目録という。計10巻に分ける。

※ 3 : [本文] は :

- ① : 篇名
- ② : 篇旨
- ③ : 原文 (頭注を含む)

より成る。

- ① 《篇名》は、例如「内篇逍遙遊第一」，以下同例。
- ② 《篇旨》は、1字下げあり。内篇は篇旨あり。外雜篇は篇旨なし。
- ③ 《原文》は、大段落毎に区切り、大段落末尾に注釈を一括して載せる。注釈は1字下げなし。頭注は、序・目次・篇旨・原文・注釈・跋全てに付す。音注及び段落表示は頭注に含まれる。本書は全文にわたって句読点なし、圈点もなし。また、付録以外は全文に訓点を施す。嚴靈峰はいう：

漢文著述，以林希逸「莊子口義」為底本。……加日文標点眉評，大抵採陳懿典所輯「莊子三註大全」各家說。（見嚴著莊子知見書目・中編250頁）

頭注は，儒仏道各家の説を多く引く。仏典は例如：

「金剛經」・「法華經」・「臨濟錄」・「円覚經」・「楞嚴經」  
・「法華壇經」・「信心銘」・「維摩經」・「華嚴經」等。

※ 4 : [跋] は :

- ① 莊子後序・林經德・景定改元（1260年）
- ② 仮題「南華真經口義徐霖景跋」・徐霖景・景定辛酉（1261年）  
を載せる。

※ 5 : [付録] は :

- ① 莊子十論・李士表  
を載せる。

本書は，全文改行なし。

56：1669年，莊子解，王夫之撰・王敵増註，捫清同治4年（1865年）湘鄉曾氏金陵節署重刊本影印<sup>※1</sup>。

※1：〔同治4年重刊本〕，嚴靈峰はいう：

在「船山遺書」内（※船山遺書40）。

清道光二十二年衡陽王世倌刊本（※1842年）。

清道光二十二年新化鄧顯鶴長沙刊本。

清咸豐湘潭刊本（※1851年－1861年）。

清同治四年湘鄉曾氏金陵節署重刊本（※1865年）。

（見莊子知見書目・中編149－150頁）。

馬森はいう：

咸豐間湘潭原刻本，在船山遺書中。（見莊子書錄）

嚴雲峰に依れば，同治4年重刊本（1865年）は，原刊本（1669年）以来約200年の歳月を経た後に公刊されたものとわかる。筆者としては，それが原刊本の翻刻本であることを願うが，長い歳月の間，どのような改訂がなされたかについては不明である。不本意ながら，重刊本に拠って其の体例を考察する。

本書は：

1：序

2：目次

3：本文

より成る。以下，説明する。

※1：〔序〕は：

①序・王天泰・康熙年間（1662年－1722年）

②序・董思凝・康熙己丑（康熙48年・1709年）

を載せる。

※2：〔目次〕は，ここでは「莊子解目錄」という。例如「卷一逍遙遊」，  
以下同例。

※3：〔本文〕は：

①：篇名

②：篇旨

③：原文（小注・評釈を含む）

より成る。

①《篇名》は、例如「内篇逍遙遊」，番号なし，以下同例。

②《篇旨》は，原文より1字下げの位置に，原文と同じ大きさの文字で記す。

内篇は，内篇篇旨なし。

外篇は，外篇篇旨あり。

雜篇は，雜篇篇旨あり。

各篇の篇旨は，「卷26外物」「卷28讓王」「卷29盜跖」「卷30説劍」「卷31漁父」以外は全部ある。雜篇篇旨に上記各篇の篇旨を削除した理由を記している：

若讓王以下四篇，自蘇子瞻以来，人弁其為贋作……故俱不釈。

③《原文》部分は，原文・小注・評釈より成る。

原文：大段落毎に区切る。

小注：小文字2行。音注は小注内に混せて述べる。王敵の増註分は，文頭に〔増註〕と冠してから述べる。

評釈：原文大段落末尾に〔解曰〕と冠してから，原文より1字下げの位置に，原文と同じ大きさの文字で記す。

本書は全体に句読点なし。文頭の改行なし。圈点なし。

57：1669年，莊子通，王夫之，挾清同治4年（1865年）湘鄉曾氏金陵節署重刊本影印<sup>※1</sup>。

※1：〔同治4年重刊本〕，嚴靈峰はいう：

在「船山遺書」内（※船山遺書41）。

清道光二十二年長沙刊本（※1842年）。

清同治四年金陵節署刊本（※1865年）。

（見莊子知見書目・中編150頁）

本書は：

1：序



2：目次

3：本文

より成る。以下、説明する。

※1：〔序〕は、「叙」と題してから、「己未春避兵……」と文が続く。

前掲の「莊子解」の序2篇が、孰れも康熙年間のものであったことを手掛りとして考量するに、己未は康熙己未・18年（1679年）を指していることはまちがいない。叙にいう：

南嶽売薑翁自叙

南嶽の売薑翁とは、王夫之の別称。

※2：〔目次〕は、「莊子通目次」という。例如「逍遙遊」，以下同例。

卷数・篇数なし。

※3：〔本文〕は、篇名・篇旨より成る。篇名・篇旨ともに文字の大きさは同じ。篇名は篇旨より2字下げの位置にある。原文・小注・音注ともになし。文頭の改行・句読点・圏点もともになし。

「讓王」「盜跖」「説劍」「漁父」を削除する。これは前掲の「莊子解」と符合する。

また、「徐無鬼」「寓言」「列禦寇」は、僅かに篇名を記すだけで篇旨はない。

馬森はいう：

是書，乃全以己見論說各篇義旨者。（見莊子書録）

補記：王夫之，号薑齋。張獻忠陷衡州，招夫之。走匿南嶽。賊執其父為質，夫之引刀自刺肢体。（見「中国人名大辞典」・台湾商務印書館・81頁）

58：1670年，莊子之学，馬驥，挾清康熙9年（1670年）刊本影印。

本書は「釋史」卷112内「列莊之学」上下に収録されている。筆者蔵本は、初版本の影印である。嚴靈峰はいう：

節録莊子原文，首加史記「莊子伝」，篇末稍引「説苑」等書作注。

（見嚴著莊子知見書目・中編151頁）

本書は、自序・他叙・目次・跋ともになし。本書は：

- 1：史記「莊子列伝」前半
- 2：原文
- 3：史記「莊子列伝」後半
- 4：原文

より成る。以下、説明する。

※1：〔史記「莊子列伝」前半〕は、冒頭から「故自王公大人不能器之」まで、原文のみ再録する。

※2：〔原文〕は、計33篇を順次配列するという常識には拘泥せず、内篇の各篇を主軸にし、関連すると思われる外雜篇を付録するという配置転換を試みている。この方式は、本稿No43、1620年、藩基慶著南華經集註の本文とほぼ同じである。但し、その分量は、殆どが抄録。また、その内容は、原文をそのまま再録しただけで、注釈は極めて少ない。内訳は、以下の如し。（内篇は内、外篇は外、雜篇は雜と簡称する）

①逍遙遊（内）

至楽（外）、外物（雜）、繕性（外）。

②齊物論（内）

秋水（外）、寓言（雜）。

③養生主（内）

達生（外）、刻意（外）。

④人間世（内）

山木（外）、天地（外）、康桑楚（雜）。

⑤德充符（内）

知北遊（外）、列御寇（雜）。

⑥大宗師（内）

駢拇（外）、徐無鬼（雜）、則陽（雜）。

⑦応帝王（内）

天運（外），馬蹄（外），肱篋（外），天下（雜），説劍（雜）。

天下篇末尾に小文字2行の小注を付す。

※3：〔史記「莊子列伝」後半〕は、「楚威王聞莊周賢」から最終まで、  
原文のみ再録する。

※4：〔原文〕は、莊子の事跡に関するエピソード（計5件）を、外雜篇  
の中から再録する。

①莊子釣於濮水の段（秋水篇・外）。

②或聘於莊子の段（列御寇篇・雜）。

③莊子衣大衣の段（山木篇・外）。

④莊周家貧の段（外物篇・雜）。

⑤莊子将死の段（列御寇篇・雜）。

以上は小文字2行の小注を付す。

本書は、音注・文頭の改行・句読点・圈点・篇旨等いずれもなし。

補記 拙著・「莊子注釈書体例考《其の3》」の誤植を以下の如く訂正する。

83頁「体例一覧表」最上段自左第14行「続点」を「読点」に、また、同表自上第4段・No26の「蕉竝」を「焦竝」に訂正する。

1993-04-29, 《其の4》浄書, 待続。